

田村 有見恵

(東京都公立学校)

「王安石の窮理、盡性、至於命—『老子注』を中心に」

北宋の思想史研究において道学は王安石の新学への対立から興ったとされている。つまり、道学の起源の前提には新学が士大夫に共有されていたという事実がある。『続資治通鑑長編』(三九〇)には、王安石が高官となる以前から学説が学者等に信奉されていたという記録があり、これは新学が数十年の長きに渉り北宋で共有されていたことを意味する。しかし、その新学がいかなる説であったのかについては依然として不明な点が多い。

本発表に関する先行研究として、新学に性命之理、窮理、盡性、至於命の学説があったことは、陳植鏗氏、漆侠氏、李祥俊氏等に指摘がある。また、北宋の虚無批判に関しては土田健次郎氏、王安石、王雱の『老子』注に関しては、井澤耕一氏、尹志華氏、山田俊氏等の研究がある。

しかしながら、その王安石の窮理、盡性、至於命の説がどのような説であったのか、なぜ窮理、盡性、至於命の説を提唱したのか、王安石以前の『老子』注とどのような思想的差異があるのかについては多分に研究の余地が残されている。

王安石の窮理、盡性、至於命の説は、「老子為言其反本、遂自道而起教」(『老子注』一〇)と評したように『老子』の反本思想と関係深い。また、王安石が「王弼又失孔子之旨」(『老子注』一)と評したように王弼との学説の差異点についても反本の境地が問題となっている。反本の復帰する境地として王弼は虚静、虚無を説いた。それに対して、王安石は『易』の窮理盡性以至於命の命に復帰するという説を立て、その命に復帰する修養論として体系的な窮理、盡性、至於命の説を唱えた。そして、それが命、性、理の説によって儒学、老荘思想、仏教を融合させた新学の特徴であった。

本発表では、王安石新学の窮理、盡性、至於命の説を明らかにすることを目的とし、王安石の聖人観、反本と至命、窮理、盡性、至於命の修養論に着目して考察する。